
王が道を征く！

葵(確)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王が道を征く！

【Nコード】

N6078X

【作者名】

葵（確）

【あらすじ】

夜の深淵の中、何処か不思議な場所で、僕は——”運命”に出逢った。

そして僕は——王が道を征く。

※こ

の作品は、他の作品のネタ切れ時の潰し用です。故に、更新は危ういですのでお気をつけください。ぶっちゃけ、思いつき。ストレス解消用作品だったりします。

First || Start of the DESTINY (前書き)

なんというか、暇が無い中で、二次のほうのネタは無いけど何か書きたいなあってときに書いて更新します。

では、いろいろと酷い文ですが暖かい目で読んでいただければ幸いです。

First || Start of the DESTINY

結論を言えば、その日、僕の日常は終わりを告げたんじゃないかな。いや、強制的に日常に終わりを告げられた、といった方が正しいのかもしれない。

昨日までの毎日。平凡で平和で平坦な毎日。まるで変化のない、充実のない毎日。

ただ、そんな日常が嫌いで。ただ、そんな『平』が嫌いで。

だから僕は、”非” 日常を求めた。

こんなつまらない毎日に終わりを告げて欲しくて、願ったんだ。

願って起きた。驚くことに。

あの日、あの場所、あの時。

僕は――『逢って』しまったんだ。

――『運命』というやつに。

――10月30日午前3時。

深夜。辺りは松崎シゲルのような黒で静まり返り、当然の如く人の子一人いない。

まあ、僕を除いてではあるが。

こんな時間、何をしているのか。
自分でもわからない。

目が、覚めた。

ただそれだけで、別に目的があったわけではない。

僕は二度寝ということが出来ないタイプで、こんな時間に目を覚ましてしまったら朝まで起きている羽目になることは分かっているのだ。

だから、外に出た。

宛てもなく、やる気もなく、足を動かし歩く。

ふと、気がつくと周りには花畑が広がっていた。

しかも空は青く澄み渡り、先ほどまでの夜の暗さは何処かへと消えていた。

どうやら歩いているうちに知らない場所に来てしまったらしい。

それも、何時間も歩いていたようだ。

とりあえず帰らなければ。

帰れば、そこには僕の大嫌いな日常があることは分かっている。

だが、だからといってどうすればいいのだ。

日常、平和、普通。十でもなく一でもなく、意味も意義もなく、尊い時間を、只管ひたすらに流されるように消費していくだけの生活。僕はそれが嫌いだった。

でも、その日常には母が、親が、兄弟が、友人が————いる
と思いきや、ドッコイ。いないのだ。

家族は、僕が子供の頃に事故に巻き込まれて死んでしまった。

友人は、いない。軽く喋る事が出来る人は愚か、目を合わせること

すら難しいほどに。

そう、僕の周りには何もないのだ。強いてあるといえば、金、家だけといったところか。

自慢ではないが、僕の家は世間一般で言う金持ち、エリートだ。だから最低限の生活には困らない。

そう、これこそが『平和』であり、『普通』になってしまうのだ。

贅沢な悩み、か。

平和が一番、普通が丁度いい、そんな言葉は僕にとってただの苦痛でしかない。

平和の中に何を見出せというのか。

普通の中でどう変化しろというのか。

そんなことを考えながら辺りを見回すと、ある異変に気がついた。

花畑が広がっている。

いや、花畑”しか”広がっていないのだ。

周囲360度。どこを見ても花、花、花。

上を見上げれば青空。

下を見れば花畑。

こんな場所が現代日本に存在しているのか。

否、ありえない。

地平線の先まで目一杯花畑が広がる光景なんぞ、日本に、もったいない地球中どこを探しても見つかりはしないだろう。

では、この目の前の風景はなんなのか。

僕の頭の中に、あらゆる情報情景より感じ取った言葉が流れ込ん
くる。

ファンタジー、つまり、非日常。非現実。

僕は、知らずの内、吼えていた。

「うわあああああああああああああああああああああああ
ああ！！！！！」

何これ何これ何これ……！？

「何じゃこりゃあああああああああああああああああああ！
！！！！！」

僕は、力なくその場に尻餅をついた。

と、尻餅をつくのと一緒に空に放った手にヒヤツとした感覚が伝わ
る。

僕が手をついたところを見ると、そこには箱。それも、棺のような
形の箱。

しかし、その棺らしきものは透き通るように透明で、実際透き通っ
て中が見えていた。

棺の中には、少女。

こんな棺の中にいるにはちょっとおかしな、健康そうな少女がお腹
のところで手を重ね、眠っていた。

その『棺』という物体の中に入っている『人』を見た瞬間、”あの
日”の光景がフラッシュバックする。

《自分の目の前で、暴走したダンプカーに轢かれる母、父、兄、姉》
《真っ赤に染まった、さきほどもで『人』だった”モノ”》

——其処から何があったかはあまり記憶していない。本当のところ、覚えているのかもしれないが、人間というのは便利なもので、自分の嫌な記憶は瓶に蓋をして封印する事が出来る。事実上、記憶はないというのに等しい。

時は経ち、幼い自分の前に置かれる白い箱。周りには葬式御用達の坊主一人。そして親族である僕だけ。

子供だった僕は、興味本位でその白い箱を開けた。

中には——何も入っていなかった。

後で聞いた話だと、僕の家族はダンプカーに轢かれた衝撃で原形もとどめないほどのグチャグチャになってしまったらしい。

何も入っていない箱を見て、僕は泣いた。何故泣いたかは分からない。でも、どうしてか泣いてしまった——

「う……………」

”あの日”の光景を思い出して、のどの奥から何かがこみ上げてくるのを何とか制し、もう一度その透き通った箱を注視する。

棺と同じくらい透き通っていそうなほど綺麗で健康的な肌。

上空に広がる碧天をそのまま写し取ったような、長い碧の髪。みどり

そして、傷から出てきたばかりの真っ赤な血のような紅色の唇。

整った、綺麗というより、可愛いという顔立ち。

身長は目測……150ちよいといったところか。

痩せすぎず、太りすぎずの丁度いい肉付きの体。

その瞼は何も見ることなく、固く閉じられている。

——全てを総計していえば、美少女。まごう事無き、美少女。
それも、僕のドストライクゾーンを秒速170kmで疾風の如く疾走していくストレートくらい。

だから、耐える事は出来なかった。

「な……………」

僕は…………もう一度叫ばずには…………いられなかった。

「何じゃこりゃああああああ……………ってアレ？」

ついつい、素っ頓狂な、辺鄙な声をあげてしまった。

見れば、棺の中の少女は先ほどまでしっかりと閉じられていたはずの瞼が開き、その目が露になっている。

黒。真っ黒。漆黒。

ファンタジーな碧の髪からは想像だになかった、日本人系の黒い目。

その黒い目は天空の碧を捉えるでもなく、真っ直ぐに僕の顔を見つめている。

いや、きつとおそらくたぶん、僕の後ろに何かがいるのだろう。

そう思い、目を逸らし、少女の見ている方向から体を退かす。

これでいいんだろう？ 何か見たいものがあつたんだろう？ さあ

僕は退いたぞ。好きなだけ見るがいいさ。

そんなことを考えながら、もう一度少女を見ると、また——目が、合った。

…………？ 何故だか分からないが、少女は僕を見ている。いや、観察的な意味での『観ている』ではなく、憂いを持った瞳で僕を『見て

いる』、見つめている。

またまた意味が分からない。僕は別にイケメンでもないし、何か特別な魅力があるわけでもない。たぶん。ひょっとしたらイケメンかもしれないけど。

不意に、少女の紅い口が動いた。

何か言っているのだろうか？ 僕は顔を棺へと近づける。

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \chi \\ \vdots \\ \psi_r \\ \vdots \end{array} \right]$$

「何だって？
とう……ふう？」

どうにも上手く聞取れない。

もしかしたら、長い間喋っておらず声が出ないのかもしれない。

もしかしたら、僕は自分が思っている以上に耳が悪く、耳鼻科に行かなければいけないのかもしれない。

……後者は嫌だなあ。

いや、またまたもしかすると、この子はとうふが欲しいのかもしれない。

何でとうふかはわからないが、天の道を行き、総てをどうにかする人なのかもしれない。

僕だって男の子だ。そういった変身モノは嫌いじゃない。

「……あ」

また、唇が動いた。

何を言おうとしているのか気になった僕は、また棺に耳を近づける。その瞬間、少女が吼えた。

「……………あ
あ^ゝ
あ^ゝ
あ^ゝ
あ^ゝ
あ^ゝ
あ^ゝ
あ^ゝ
！」

「え！？ 何！？ 暴走！？」

「ううううあああああゝあゝあゝあゝ!!」

今まで目しか動かさなかった少女が、悲鳴とも叫びともつかないような声が花畑に広がる。

不思議な事に、声が拡散することなく花畑の中で反響していく。

その叫びの『音』は、一瞬にして僕を囲むようにして襲い掛かってきた。

無論、普通の人間である僕がそんなことに対応できるはずもなく、音の奔流に飲み込まれていく。

意識を、手放したい。

こんな音の世界から、抜け出したい。

でも、手放したら抜け出せないような気がする。

でも、抜け出したら手放せなくなるような気がする。

足掻く、もがく、抗う。

手放しちゃ、いけない。

抜け出さなきゃ、いけない。

——ドクン。

やけにはっきりと、心臓が胎動したのを感じた。

——ドクンドクン。

今度はもっと早く、心臓が震える。

——ドクンドクンドクンドク——

早く、速く、疾く、心臓から血液が流動していくのを、感じる。

すると、どういうことか。

意識は保った。

音の奔流はいつの間にか消えていた。

花畑は消えた。

残ったのは、灰色の空間と、僕と、無機質で透明な棺と、有機質で半透明な少女だけ。

唐突に、棺の蓋が動き出す。

徐々に、段々と、誰が動かすでもなく勝手に開いていく。

ああ、最近の棺はデジタル式の遠隔操作タイプなのか、と僕は感嘆の意を表す。現実逃避ではない。

ゴトン、という重い音を立てて、棺の蓋は灰色の地面に落ちた。

透明な棺の中から、少女のか細い腕が、か細い手が持ち上がる。

僕は夢を見ているのか。

否、こんな夢などあってたまるか。こんな夢を見ているという事は、僕は欲求不満な変態さんだということになってしまうではないか。それだけは、断じて認めるわけにはいかない。僕は、欲求不満ではない。……違った、変態ではない。欲求不満は否定できない。

徐に、少女は棺の中から上体を持ち上げた。おもむく

目の前で唾然としていた僕を見るや否や、少女は僕の顔に自分の顔を近づけてきた。

これは危ない——教育上、危ない気がする。ただでさえ最近はそういうのに五月蠅いのだ。それに、自分で言うのも難……だが、初心な僕は、こんな可憐な少女に目と鼻の先まで近寄られて正気で立っていられる筈もない。

すぐに後ず去ろうとする、が、しかし。

その瞬間——少女の顔のパーツの一部が、僕の顔のパーツの一部に当たった。

柔らかい、それがその瞬間の突発的な感想だ。

女の子というのは、どこもかしこも柔らかい。ふにふにと……ふにふにと……やあらかい。

まあ、女の子の顔自体柔らかいんだけど、何よりも柔らかいものがある。

ほった？ ——Non. 確かに柔らかいが、違う。

髪？ ——Non. その柔らかいとは違うものだ。

そう……その柔らかいものは、真っ赤な紅い……く……く、くちび………る——

——なんでええええええええええええ！？

口を動かして力いっぱい叫びたいところではあるが、唇があって叫べない。

まったくもって——わけが分からない。

頭の中が真っ白になって、何も考えられなくなる。多幸感というか、なんとも幸せな気分だ。

真っ白に燃え尽きた僕は、指先一つ動かせなくなって。

目の前の少女は、そんな僕の様子に気兼ねする様子もなく、ただ唇を僕と重なり合わせている。

前触れもなく、パツ、と少女の方からその柔らかい唇を離れた。——ちよつと残念だなんて思っていないんだから！

その唇が話された瞬間、バチン、と夢が覚めるような——そんな、感覚が僕を襲う。

ああ、やはりこれは夢だったのか。

夢から覚めれば、また退屈な日常が、普通が戻ってきてしまう。

嫌だ。

嫌だ。

もう、そんな『平』は嫌なんだ——っ。

やめて、いかないで……夢を覚まさないで——！

そんな僕の願いも虚しく、灰色の空間はどんどん白くなって――全部、消えていってしまった。

……

パツ、と目を開いた。

目を開いたという事は、やはり先ほどまでの事は夢だったのか。やっぱり駄目なのかな……この平和から抜け出すのは。

僕は半ば諦めた心で体に掛けているだろう掛け布団を掴もうとして「あれっ？」

素っ頓狂な声と一緒に、虚空を掴んだ。

見れば、いつも惰眠を貪ることをサポートしてくれる布団くんがいらっしゃらない。

どころか、なんと言うか……その……壁も、ない。

どうやら僕は随分と寝相が悪かったようだ。

布団から野外まで移動するなんて、ある意味才能ではないだろうか。

うん、まあ、その……なんだ。

現実逃避はやめようかな。

現状を簡潔に言うと、だ。

僕は、草原の上に、夢で見た美少女と一緒に、寝っ転がっていた。

……うん。

「なんじゃこりゃあああああああああ！……!?!?」

これが、僕と彼女——アルという名の『運命』との邂逅だったわけだ。

continued.

——To be co

STINY.

Let's broken DE

First || Start of the DESTINY (後書き)

続きはあんまり期待しないでねっ！

お気に入りだったりなんだったり入っていただけると、嬉しかったです。

言葉の用法ミスや文におかしな場所、こうしたらいいといった感想は勿論、面白かったや面白くなかったの一言感想だけでもいいので、いただけると感謝感激で御座います。

では、またお会いできる時まで。

Second || I Recognize DESTINY (前書き)

勉強するために深夜に起きたんですけど、勉強がかったるかったの
で、なんとなく二話目を書いてみました。

自分で全部決めなくちゃいけないって難しいけど、自分で完全に好
きなように出来るのは面白いですね。

推敲とかはしてないですが、一応書きながらチマチマ考え直してい
るので大丈夫だとは思いますが、どうかしらミスがあればご報告い
ただければ嬉しい限りで御座います。

お気に入り登録してくださった方、感想を下さった方、真にありが
とう御座います。

当小説更新後、返信させて頂きます。

では、前回より少ない文章& a m p; 毎度の如く拙い文章ですが、
見て行ってやってください。

Second || I Recognize DESTINY

非現実というものは、意外にあっさりと手に入ってしまうものだったらしい。

……この出会いがあっさりしているのかと言われれば、まあ、危ういところではあるが。

ある意味、塩ラーメン（日○製）のようで、本当のところ、どんこつラーメン（博○製）のようなものかもしれない。
それくらいに——なんというか——訳がわからん。

何……？

馬鹿なの……？

死ぬの……？

ねえねえ、私メ○ーさんよ……

そんなことをいわれても仕方ないくらい、まったくもって意味がわからない。

最後の聞いたら後ろに気配を感じたけど気のせいなんだろう。

『日常』、『非日常』。その二つの言葉が、僕の頭の中をぐるぐると回る。

まあ、いいんじゃないかな。

しばらく脳内で議論を続けていたら、そんな結論になってしまった。
ある意味、僕の望みは至極簡単に偶発的に叶ったわけだし、それでいいんじゃないかな。終わりよければ全てなんとらってやつだろう。

と、いうわけで。

どうも、僕です。主人公○です。恐らく、メイビー。

なんと言いかかんとするか、どうやら僕という存在は何処か変なところに来てしまったらしい。

理由は言うまで——というか、考えるまでも無く、僕の隣でスヤスヤと可愛い寝息を立てている少女の所為だろう。

僕自身にはそんな超常的な能力は無い……はずだし。いや、別にあったらいいなあと思うのは日本男児というか、世界の男の浪漫というものであって、別に中二だとかエターナルなんたらブリザードだとか、そういったものじゃないわけで。ただちよつと、不思議な事が出来たり、魔法が使えたり、日本刀を使いこなせたり、起きたら性別がかわって超美少女になってたりとか、そういった、非、現実的だけどやっぱちよつと憧れちゃうなあっていうのは仕方ないと思います！ まる！ あ、エクスクラメーションマークを使ってる分、まる！ は要らないのかな。

閑話休題。

なんて、どうでもいいことに思考の大部分を割いちやうくらいに、僕の頭の中は2000年の恐怖の大魔王予言並みの地球の混乱と同レベルの大混乱なわけで。

結構論点がずれちゃった感じも否めないわけではない感じではあるけど、やっぱり辺り周囲360度上下右左AABBBXYXYペペペペペペペペ——って何のコマンドを入力してるんだ僕は——を見回せば、現代日本では根本的にありえないような光景が広がっているわけで。それが僕の中での異世界説という仮定を結論付けちゃってるわけだ。

空を見上げれば、そこは雲一つと無い空が……真赤な……空が……

「は……はは……ははは……」

僕の、本当は隠された秘境に迷い込んでしまっただけで、やっぱりここは日本なんだーっ！、説が粉々に、それこそ原子レベルで粉碎されてしまったわけで御座います。

僕自身のゲシュタルト崩壊が目に見えるようです。

太陽の位置からして、恐らくきつとまだ朝だろう。

単純に、僕が深夜徘徊を始めた時間から考えて、あの花畑までを合計してちよつと睡眠時間を加算すると、だいたいこの位の陽の位置が妥当なのではないだろうかヒヤッハ。

人というのは、あまりに疲れすぎたり、あまりに混乱したり、あまりに愕然とするとテンションが可笑しくなっちゃうって言うのは結構有名……というか、みなさんご経験があると思います。僕はあります。今がその時です。

ガサリ。

僕の後ろの方の茂みが音を立てて動いた。

そうそう、言い忘れていたんだけど、僕が寝ていた場所は、たぶん森の中で、左右の360度には木々が生い茂っていて、その木の一本一本が5mくらいありそう。

それと、何故か僕たちがいた場所だけ何にも無くて広場みたいになってたんだけど——っていうかここはこの森の広場なんだろうなあ。

ガサガサ。

また茂みが音を立てた。

まさかメリ○s……げふげふん。考えるのはやめとこう。

動物、だろうか。猿とか……猫とか……小動物だったらいいなあ、なんて考えている僕の頭の中には、ここが異世界であるなんてことは、思考の端に追いやられてしまっていた。

ノソリ、少年漫画であればそんな効果音がつきそうな雰囲気を漂わせて茂みから出てきたのは、当然の如く小動物なんかじゃなくて、まあ、ファンタジーにあってなくてはならないもの、つまりあれだ、モンスターだ。すごい、モンスターモンスターしたモンスターだ。……そういう人が見れば間違いなく、凄く……おっきいです……ポっ、なんて言いそうな、筋肉隆々の太くて硬そうなごつごつとした長い——棍棒を持った腕に、体には重厚な鎧を纏っていて、その上からでもわかるような肉厚な筋肉が。

そして極めつけは、その……とても言いにくいんだけど、というか世のモテナイお方々から非難の声が上がりそうな……アンバランスなほどの整ったイケメソ面が、マッスルバディな肉体の上に乗っかっているわけです。ゲロゲロゲロ……。

身長は目測、2,5mくらい。それにあの筋肉を加えたら、体重は200k以上ありそうだ。

……こいつあ、とんだ化物だじエ。モンスター無論、色んな意味で。

あれれ？　なんか目が怪しく光っていますね。これはアレです、ムツさんも言っていました。こういう目は、獲物を見つけたときの目なんだそうです。

当たり前ですが、獲物はきつと僕たちなんでしょう。とても、とても逃げたいです。恐ろしくてぐうの根も出ません。用法が間違っているとか、焦っていて全然わからないです。

体が、恐怖で硬直して僕の命令を聞いてくれない。

初めての体験に、僕は驚きと感動と恐怖を隠せなかった！　ハラハラドキドキ！

頭を冷やすために思考を変えようと思い、チラっと、横にいる少女を見た——んだけど、そこにはいつの間にもやら、何もいなかった。

アレ？　と思い、モンスターに警戒しながらも辺りを見回すが、見

当たらない。

その時、自分の肩にずしり、という重みと、ふわり、という感覚と、いい匂いが降りかかった。

手探りで後ろを触ると、プニという柔らかい感触。

どうやら、横にいたはずの少女はいつの間にも僕らの背中にはついて寝ていたようだ。

そりゃあ、辺りを見回しても見つからないわけだ。

と、冷静に考えたところで、どんな寝相だよ！ と突っ込みたくなつたが、ぐっと抑える。

今大きな声で突っ込めば、今は何もしてきていないモンスターが何か仕掛けてくるかもしれない。

そしたらアノ、太くて硬そうなアレでやられちゃうかもしれない。それだけは避けねば……！

まあ、とりあえずは立とう。

今気付いたんだけど、ずっと座っていた。これでは何かあったときに即座に対応できないではないか。危ない危ない。

少女がずり落ちそうになるが、その華奢な手をもって、僕の首に引っ掛ける。

意外と軽い。某蟹に体重を取られた5kgの人とまではいかないが、軽い。女の子ってのはこんなものなのだろうか。

でも、どこか違和感を感じる。見た目は普通の美少女なのに……つて、美少女は普通じゃないけど、何か、作り物めいた雰囲気がある。機械というか、人形というか、人の人となしえている人らしさをほとんど感じない。でも、こんなロボットがあるなら、現在の科学技術はもっと先を言っているのではないだろうか。というか、医学パネェ！ 癌とかマジワロス つてレベルになつてると思う。

「ウオオオオオオオオオオ！！！」

突然、イケメソマッチョマソが雄叫びを上げる。

なんだろう。痺れを切らしたのかな。

なんてことを考えた瞬間、茂みが大きく揺れた。ガサリガサリと、周囲の草むらのいたるところから草が擦れる音が上がる。

僕は目の前の光景に慄然とするしかなかった。

雄叫びの後に現れたのは、最初の一匹（一人？）と同じ図体、同じ顔を持ったヤツ。当然、1匹2匹ではなく、10……20くらいいるのではないだろうか。

僕の左右への視界は、数秒で、このモンスターたちしか写らなくなった。

恐らく、恐らくしなくても、さっきの雄叫びは仲間を呼び寄せるためのものなんだろう。

僕は恐怖で腰を抜かすしかなかった。僕は先ほど立ち上がったばかりの腰を、また地に落とす。

ドサリ、とその拍子に後ろに乗っかっていた少女が落ちた。

「あでっ！」

——初めて聞いた、人間の言葉としての少女の声は、なんともいえないモノだった。

n t i n u e d .

——T o b e c o

S T I N Y .

L e t ' s b r o k e n D E

Second || I Recognize DESTINY (後書き)

では、次回もお楽しみにされてくださいヒャッハー調子こいてすいませんヒャッハー。

世紀末な感じの脳味噌ですヒャッハー。

か、感想とか書いてくれたりお気に入り登録したりポイント入れてくれたりしちゃってもいいんだからーっ！

ほんじゃ、ばいばい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6078x/>

王が道を征く！

2011年11月16日10時38分発行